
繋がる糸の先

橘。

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

繋がる糸の先

【Nコード】

N4932X

【作者名】

橘。

【あらすじ】

小柴真奈。大学二年。平々凡々な私だが、人とは違う特技を持っている。それは人々の左手小指から伸びる運命の赤い糸が見えること。その特技を活かして友人達の恋愛相談にのったりする私の最近の趣味は同じサークルの同期、久我晃平の赤い糸観察。芽が出たばかりの植物のように順調に伸びているその糸の成長を微笑ましく見守っていた私だったが……。あれ？なんだか糸が弱ってない？なんで？

1・特技

女の子なら誰もが一度は憧れる赤い糸。そしてその先にいる運命の相手。

けど勘違いしないで欲しい。小指から出ている全ての糸が初めから誰かに繋がっているわけではない。生まれた時から相手と繋がっているのはほんの稀だ。その殆どが長い長い人生の出会いの中で繋がる先を見つけるのである。けれどそれも絶対ではなくて、一度結ばれた糸はふとしたきっかけでほどけてしまうこともある。皆、誰しも糸の先の相手と結婚するとは限らない。それとは逆に一度解けた糸はまた別の相手に繋がることもある。結局は決められているのではなく、自分達で運命を見つけ、繋いでいくものなのだ。

何故私、小柴真奈がそんなことを知っているのかと言うと、一言で言えば血筋である。母方の家系が何故か『運命の糸』とやらが見える血筋で、私は思春期を迎えた頃からそれが見えるようになった。糸が見えると言っても運命という未来が見えているわけではなく、要はフラグが視覚化したようなもので、あの子は今あの男が好きなのか、とかあつちは本命がいるのか、とかそんなのが分かる程度だ。母の実家はそんな特殊能力を発揮して昔から縁結びの神社をやっている、母の姉、私の叔母がその家業を継いでいる。他にも親戚の中には占い師をやったり、結婚相談所を開いたりとそれなりにこの能力を生活の糧にしている人達も居るといふ。けれど私の母は普通にサラリーマンの父と結婚して、普通の主婦をやっている。その子供である私にとってこの能力は『空気が読める』程度に活躍するだけのものなのだ。時折それを活かして恋愛相談にのることもあり、友人知人の間では地味によく当たる占いのように有名になったりもしている。

所で、極稀に一度は結ばれなかった糸が時を経て、再度結ばれることもある。

その珍しい例が私の親友、小森晶^{おきり}である。

本人は小柄でかわいらしい女の子なのだが、晶は小さい頃から男の子のような名前だとよく同級生にからかわれたらしい。そのせいか、彼女は引つ込みじあんで、あまり積極的に男子と関わる方ではなかった。

そんな彼女が最初に恋をしたのは中学の頃の社会科教師。思春期の学生が教師に憧れ、恋心を抱くのはそう珍しい話ではない。けれどその教師の指の先にはすでにしっかり結ばれた糸があつて、同中であつた私はそれを話すかどうか当時悩んだものだ。それでも憧れは憧れとして晶は本当に先生のことが好きで、一生懸命に恋をしてきた。だから言わなかつた。いや、言えなかつたというのが正しい結果、彼女の初恋は苦い思い出となつたのだつた。

彼女が再度結ばれた相手というのはその教師のことではない。当時彼女に片想いをしていた坂上という男子生徒のことだ。彼は先生に片想い真つ只中だつた彼女に告白し、玉砕した。けれどその後、彼の糸が他に向かう事もなく、見事想い続けて彼女の糸と繋がつたのである。

私がそれを聞いたのは中学を卒業して二年後のこと。彼女に坂上を紹介された時「よくぞ気張つた！坂上！」と褒め称えたものである。大学生となつた今でも二人の糸は太く、がっちり繋がっている。恐らくこのまま結婚するだろう。友人達にもそう言っているのだ、このまま見事ゴールインすれば私の伝説が一つ増えるわけだ。

さて、とにもかくにも私には皆の赤い糸が見える。その為、いつの間にか人間観察が趣味となつていた。けれど肝心の自分の恋はと言つと、残念ながら上手く言つた例がない。常に皆の糸が見えている私にとって恋愛は他人事のような気がすることや、ちよつといい

な、と思ってもすぐに上手くいかないことが分かってしまうのがその原因だと思う。

私が所属している写真部の部長をやっている大野先輩がいい例だ。穏やかな性格、中肉中背、笑うと目が糸のようになってしまう所なんか私の好み直球ど真ん中だったりするのだが、出会ってときめて三秒後、彼の小指の糸の先に相手がいることが分かってしまった。そんなことを繰り返しているからか、まともに片思いすらしていない気がする。

なら自分の糸を見ればいいじゃないかと思うだろうが、残念ながら自分の糸だけは見ることが出来ないのだ。これは私と同じ力を持つていた母も一緒に、どうやら女性にだけ遺伝するこの能力はもっぱら他人を観察することに費やされるらしい。

という訳で、他人の恋愛相談には的確なアドバイスをすると評判の私も恋愛マスターとは行かず、自分の方はからつきしなのである。ちなみに私の友達も写真部の部員達も皆私が部長を好きなことを知っている。知られた所でどうにもならないのは分かっているし、糸が見えてしまう私は自分の気持ちを隠すのは不公平な気がして、気になっている人がいればあっさりと周囲に話すことにしているのだ。

大学二年になった私の最近の趣味は久我晃平の糸観察である。久我は私と同じ大学の同期であり、同じ写真部の部員だ。

最初に出会った頃、久我の小指の先には糸が無かった。いい歳して思春期もまだなのか、と思っていたら、会う度によきによきと糸が伸びているのだ。まるで小学生の頃の朝顔の観察のようで興味を惹かれ、今では彼に会う度小指を確認してしまう。伸びているのは彼の気持ちが生きている証拠で、けれど糸は太くはなく不安定、まだ誰とも繋がってはいない。要は片思いなのだ。

久我も私もよく写真部の部室に入り浸っている。お互いに大学の

近くでバイトをしているので、それまでの時間潰しで部屋に行くとき良く顔を合わせる。

写真部といっても真面目にやっているのはほんの数人で、二十名ほどいる部員のうち、半数以上が幽霊部員だ。その為活動も多くはなく、部屋に顔を出すのは私や久我の様な時間潰しの輩がもっぱらなのである。

かく言う私も写真自体にそれ程興味があるわけではない。普段見えている糸も、ファインダーを通すと見えなくなるのだ。それが面白くて、いつか糸の見える写真は取れないかと無駄にバシバシとっていた頃の名残である。その為一眼レフなどの良いカメラを持っているわけではなく、正直使い捨てやデジカメで十分だと思っている。そう言えば、入部した頃の部長に褒められたことがあった。確かに技術はないけれど、写っている人達の心の内側みたいなものがちゃんと収まっていい写真だよ、って。その時は自分の能力うんぬん無しに、素直に嬉しかった。

そんな事を思い出しながら、今日も時間つぶしに皆が取った写真を収めているアルバムをパラパラと捲る。私のバイトが始まるまでは後一時間半。まだ久我は来ていないが、今日は水曜日だから私も彼もバイトがある日だ。学科が違うので一緒に来る事は無いが、久我也後で顔を出すだろう。

去年卒業した先輩達が取った写真を見てみると、ガチャツと部屋のドアが開いた。人数の少ないサークルだが、様々な機材もあるし、暗室も備え付けられているので中は結構広い。一番奥の椅子に座っていた私は開いたドアに目を向けた。

「こんにちはー。」

「お、美紀ちゃん。こんにちは。」

「あれ？真奈先輩だけですか？」

「うん。」

今年の新入生である美紀ちゃんはゆるくパーマをかけた栗色の髪を今日は耳の横で一つにまとめている。いつも見る度髪形が違って不器用な私から見たら羨ましい限りだ。緩いシフォンのカットソーに小花柄のミニスカート。ふわふわした印象の可愛い後輩だ。

因みに私はデニムのバギーパンツにお気に入りのデザインTシャツとラフな格好。髪も真っ黒のストレートを顎のラインで揃えたシヨートボブ。大体こんな楽な格好が多い。スカートを穿く事もあるが、パンツのスカート3くらいの割合だ。

まあ、私のことはどうでも良いとして、彼女が「真奈先輩だけですか？」と言ったのには訳がある。彼女は何気なく口にしたつもりだろうが、私にはその真意を良く分かっていった。彼女は私と同様ここに顔を出す久我のことが好きなのだ。

美紀ちゃんとは他愛の無い話をしながらさり気なくその左手の小指をちら見する。その糸は短いが太い。糸が太いのは彼女の気持ちがいっしょかりと一人に向かっていている証拠。短いのはまだ久我に想いが届いていないから。

もっぱら私の観察対象となっていて久我の糸とこの先が繋がる事になるのかもしれない。そんな事を考えていると再びドアの開く音がした。ほぼ同時に隣に座っていた美紀ちゃんの声が若干高くなる。

「久我先輩！こんにちは。」

「ちわ。」

おお。グットタイミング！！

私も軽く久我に挨拶をしつつ、再び美紀ちゃんの小指を見る。するとその糸が真っ直ぐに久我に向かって伸びようとしている。おお、青春だね！

そんな糸の動きに夢中になっていると、コンッと硬い物が頭に当たった。

「痛て！」

「ぼーっとしてるからだ。」

顔を上げれば久我がその手に紅茶の缶を持っていた。しかも私の好きな期間限定アールグレイのロイヤルミルクティー！！どうやらこれで小突かれたらしい。それをポイツと投げてよこしたので慌てて両手を伸ばして受け取る。危ないなあ、落としたらどうしてくれるんだ。

久我は私の正面にあつたパイプ椅子に腰を下ろして、自分はアイスコーヒーの缶を開けていた。久我の大きな手に握られた缶は私と同じ大きさとは思えないほど小さく見える。

久我は背が高い。確か180cm以上はあつたような気がする。肩幅もそれなりにがっちりしていて、アメフト部にも居そうな感じだ。顔は奥二重の目に通った鼻筋。それなりに整った顔をしていると思うが、あまり愛想がないせいか一見すると怖い。だがそれも仲良くなってしまう気にならない程度で、うちのサークルの中でも浮いたりはしていない。

私は久我の奢りである紅茶を遠慮なく受け取った。

「ごちー！」

「ああ。」

そんな私達のやり取りを見ていた美紀ちゃんがぶくつと頬を膨らませる。なんだその仕草。可愛いじゃないか。こうやって男は騙されるのか？いや、むしろ私なら積極的に騙されたいよ。

「真奈先輩ずるーい！」

「あはははっ。いいだろう！これは私の戦利品なのだ！」

「戦利品？」

こてつと首を傾げて美紀ちゃんは久我を見た。だが久我は説明が面倒なのか（多分そうだろう）、何も言わずにテーブルの端にあるオセロ盤を指差したただけだ。

「オセロですか？」

「そ。昨日暇だったから久我とやったんだけど、2勝1敗で私が勝ったの。」

「へ〜。先輩強いんですね。」

「ふふん。まあね〜。」

得意げに言うのと久我が不機嫌な目を向けてくる。なんだオセロで負けたぐらいで大人気ないな。

「私もやりたいです！でも、そんなに強くないし・・・」

私と話しながらもちらちらと美紀ちゃんの目が久我に向けられる。ほほう、成る程。皆まで言わなくてもお姉さんは分かっていますよ。

私は立ち上がってオセロ盤を持ってくると、テーブルの上に広げた。

「んじゃ、久我とやってみなよ。いい勝負かもよ。」

「え？いいですか？久我先輩。」

「・・・ああ。」

おおつと、美紀ちゃんの糸の色がより鮮やかな赤色になったよ！これは彼女が良い意味で興奮している証拠。好きな人と二人でオセロなんてテンションマックス！って所かな？いやあ、いい仕事したよ私。

何気なく部屋にかけてあるくすんだ黄色の壁掛け時計を見上げる。

私のバイトの時間まではまだ一時間ほど余裕があるが、ここでもう一仕事するかな。

「あつと、今日はバイト前に本屋にいきこうと思ってたんだっ！じや、私帰るね。お疲れ〜！」

「あ、お疲れ様です！」

「……………」

よっしゃ！私は今日も空気読んだよ！暇つぶしの場所がなくなっ
てしまったのは仕方ないけど、人の恋路を邪魔する奴は馬に蹴られ
てなんとやらってね。

そう言えば久我の系観察するの忘れてた。まあ明日もバイトだし、
明日でいつか。もしかしたら今日の私の心遣いの成果が現れてるか
もしれないし〜。

るんるん気分でバイト先近くのカフェに向かう。給料日はまだ先
だけど、自分へのご褒美にベリーパフェ食べちゃおつと。

2・悩み相談

翌日。いつものように写真部の部室に向かっていた私は、廊下の先に美紀ちゃんの後姿を見つけた。どうやら彼女も部室に行く所らしい。今日も久我が部室に来る日だし、奴に会いに行くのだろう。

あら？これってやっぱり空気読むべき？

すっかり日課となっている久我の系観察が出来ないのは残念だが、せつかく二人の系が結ばれるかもしれないだし、邪魔はしちゃダメだよな。

明日、金曜日は私も久我也バイトはない。サークルは毎週火曜のみだから、それまで久我と顔を合わせる事も無い。日が空いちやうけど仕方ないか。

流石に二日連続パフェを食べに行く金銭的余裕は無く、私は大学の図書館で時間をつぶす事にした。

「あれ？小柴？」

「お、坂上じゃん。久しぶり〜。」

中学の同級生、そして私の親友晶あきらの彼氏でもある坂上喜一は何やら重そうな本を抱えていた。晶は女子短大だが、高校で学校の分かれた私と坂上は大学で再び一緒になったのだ。学科が違うので彼と会うのも久しぶりだった。

「何？まさかもう試験勉強？」

「まさか。レポートの資料集め。来週提出なんだ。」

「へえ。大変だねえ。」

「小柴は？」

「うーん。まあ、暇つぶし。」

「市立図書館じゃないんだ。小説なんかはないぜ。」

「あゝ。そつか。じゃあ寝てよつかな。」

すると彼は呆れた顔をした。中学の頃から女子に人気のある奴だったが、今でもその爽やかな容姿は健在だ。現にちらちらとこちらを窺っている女子が視界の隅に入る。だが残念だったな、花の女子大生達よ。このイケメンはすでに私の親友のものなのだ！

「マジで暇つぶしなんだな。この後なんかあるのか？」

「うん。バイトまで一時間ぐらい暇してて。あ、晶元気？」

「・・・ああ。元気だよ。」

いつもはクールな彼が照れたように言いよどむ。その頬がほんの少し赤くなっているのは気のせいじゃないだろう。良い意味で正直な奴なのだ。

「ふふ〜。」

「・・・なんだよ。」

「せっかく久しぶりに会ったんだし、晶のこと聞かせてよ。」

「・・・。お前、良い暇つぶしが見つかったと思っただろ。」

「あ、バレた？」

人の惚気話は好物だ。それが親友となれば尚更。お互い忙しくて最近晶に会っていないのだし、色々聞いても良いだろう。

私は坂上が本の貸出し手続きを終えるのを待って、共に図書館を出るとそのまま校内のカフェへと向かった。

火曜日。今日は写真部の活動日だ。久しぶりに部室に顔を出した私は、これまた久しぶりに部長と顔を合わせた。

「あ、大野部長こんにちは。」

「真奈ちゃん。こんにちは。」

柔らかい表情で部長がにっこりと笑う。ああ、今日も優しげに細められる目が素敵。なごむわあ。これぞ癒し系！

大野先輩の笑顔にほこしながら空いた席に腰を下ろす。大体皆が座る位置は決まっていて、私は今日も一番奥の端に座る。するといつも通りその正面には久我が座っていた。

「よお。」

「お、今日は早いね。」

「六限が休講になった。」

「マジで！いいなあ。」

「お前は初めから六限ないだろ。」

「あははっ、バレた？」

すると不意に頬杖をついていた左手が目に入った。久しぶりに目にする久我の小指。そこから伸びた糸。

（あれ？）

思わずじつと見詰めてしまった。

（な、なんでえ〜！〜！）

先週まで順調に育っていた糸が弱々しくなっている。細くなり、

長さも短い。色もなんだか暗くなってない？

あまりずつと見ていると不審に思われてしまうので、メールを手エックするフリをしてさり気なく携帯を開いた。夏休みに育てていた向日葵に水をやり忘れて枯れてしまったみたいな気分だ。せっかく美紀ちゃんと二人きりになるチャンスを増やしたというのに、何故上手くいかなかったのだろうか。

そこで部室の入口近くで同期の女の子と話をしている美紀ちゃんを見てみる。だが彼女の系には変化が無い。友達と話をしていても彼女の系はピンと久我に向かって伸びていて、彼女の方に心変わりはないようだ。

もしかして、私何か間違えた？美紀ちゃんは久我が好きだけど、最近育っていた久我の想いの先は美紀ちゃんに向かっていたのではないのだろうか。肥料を与え間違えた、もとい協力する方向を見誤ったらしい。

なんだか申し訳なくなつて、私は久我に声を掛けた。

「あのさあ、久我。」

「ん？」

「あ・・・いや、最近なんか悩んでる？」

「・・・なんだ急に。」

「ん」と、なんとなく？」

説明しようがなくてへらりと笑って誤魔化すと、久我は溜息付いて顔を逸らした。あ、こいつ私の気遣いを流しやがったな。

けれど、話したくないのならば仕方がない。それ以上追求は出来なくて、その日はいつも通りにサークル活動をして過ごした。

* * *

翌日の水曜日。私は部室の前で固まっていた。

(うーん。どうしよう。)

今日はまだ部室に誰も来ていない。水曜は私も久我もバイトの日。部室に居れば後から彼も来るだろう。そして多分美紀ちゃんも。ただこの所バイトの日でもここに来る事を避けていたから、これ以上それを繰り返していると時間つぶしに来るのが気まづくなりそうだ。それは困る。お金のかからない貴重な場所を失うのはやっぱり惜しい。

一人でうんうん唸っていると、後ろから肩を叩かれた。

「うわっ！」

「・・・声がでかい。」

「あ、ごめん。」

声だけで振り向かなくても誰だか分かる。すっかり不審者扱いの目を向けてくる久我に曖昧に笑うと、私は彼と共に部室に入った。まあ、見つかっちゃったことだし、ここまで来たら逃げるわけにもいかないか。

私達はいつもの場所に座る。普段はそれぞれに携帯をいじったり、今日の授業の話をしたりと無難な時間を過ごすのだが、今日はやけに神妙な顔をした久我から口を開いた。

「お前、坂上と知り合いか？」

「坂上？つて坂上喜一？」

「ああ。」

「うん。同中だったよ。あ、そっか。久我も国際経済だったけ？」

「ああ。」

坂上は国際経済学科。久我と同じ学科なのだ。互いに名前を知っていても不思議ではない。坂上から私の話を聞いたのかと思ったが、疑問系で投げかけられたという事は違うのだろうか。

「坂上と仲良いんだ？」

「いや。普通に話す程度だ。」

「坂上から私の事聞いたんじゃないの？」

すると何故か久我は睨むように私を見た。なんで急に不機嫌そうなんだ。そう言いたかったが、とりあえず空気の読める私は黙っておいた。

「・・・先週、木曜あいつといただろ。」

「ああ、木曜ね。いたよ。もしかしてカフェで見かけた？」

「ああ・・・。」

久我は元々口数の多いほうではないが、それにしあって今日は歯切れが悪い。

(はっ！これはもしや・・・)

私はじつと久我の顔を見る。

「・・・なんだ。」

「久我ってさあ。もしかして・・・。」

「・・・。」

「坂上と仲良くなりたいの？」

「はあ？」

すると久我は素つ頓狂な声を上げた。おお、なんか珍しいな。

「なんだ。違うのか。」

「何でそうなる。」

「だって、やけに坂上のことばかり聞かから。」

「……。ただの同級生か？」

「うん？違うよ？」

「……。どう違う。」

「坂上はねえ、私の親友の彼女なの。」

ふふん、と自慢げに言うとき久我はぼかんと間抜けな顔をした。

「……あ、そう。」

「うわっ！なにその興味ねえ、みたいな返事！そっちが聞いたくせに！」

「はいはい。悪かったよ。」

「軽っ！！」

なんだか話をしている内にいつもの調子が戻ってきたらしい。私が言いたい事を言っつて、久我がそれを軽くあしらおうとする。なんとも失礼な態度だが、これが私達のいつものやり取りだ。

久我の顔から不機嫌さがなくなつた事を確認した私は、さり気なく彼の左手を見る。昨日と同じでやはりその糸は弱々しい。うーん。聞いちゃいけないかもしれないけど、やっぱり気になる。なんだかんだ言つても一年以上の付き合いになるんだし、悩みぐらい聞いてあげたいじゃないか。

糸が見えるなんて特殊能力を持っているせいですっかり世話焼きになつている私は、昨日と同じ問いをもう一度口にした。

「ねえ、なんか悩んでるんだっいたら愚痴くらい聞くよ？」
「……………」

久我が私を真っ直ぐに見る。その目を見れば彼が迷っているのが分かる。まあ、女の子同士と違って異性には恋愛相談なんて辛い。元々久我は自分のことをペラペラしゃべる性格ではないし、これでダメだったらもう聞くのは止めよう。

そう思って彼の言葉を待っていると、久我は私から目を逸らしたままポツリと言った。

「……何考えてんのか分かんねえ。」

ほう。それは久我が好きな娘のことだね？まあ、皆好きな人のことになると盲目だから。好きになった途端に分からなくなったり、気にすればするほど見えなくなったりするもんだよねえ。

そんなことを言いながらうんうんと頷く。

「でもさあ、まあ、これは私の勘みたいなものだけど、もしかしてちよつと諦め気味じゃない？」

彼の糸が伸びるところか以前よりも縮んでしまったのは、気持ちの後退している証拠だ。久我が完全に諦めてしまえば糸が消えてしまつ可能性もある。芽が出た時から見守っている私からすればそれは寂しい。だが、それに応える久我の声は暗かった。

「そいつは俺のことどうも思っちゃいない。」

「どうして？そんなの分かんないじゃん。告白されてから意識することもあるよ。」

「……………」

「……何？」

何だ。その目は。私の言葉を疑ってんのか。これでも何人もの縁を取り持った実力者だぞ私は！

「・・・いや。お前は、まだ部長のことが好きなのか？」

「うん。好きだよ。」

「でも彼女がいるだろ？」

「そりゃそうだけど。他に気になる人がいるわけじゃないし、今のところ一番は部長だもん。」

すっぱりと言い切る私に久我は眉間の皺を深くする。

「部長の何がそんなにいいんだ？」

「うーん。顔も声も身長も性格も好き。私の理想の男性像ぴったりなんだよね。」

「あ、そ。」

「そういう久我は？その子のどこが好きなの？」

「・・・。」

「何よ。人に言わせて自分は言わない気？」

それはズルイぞ、久我。お互い片思いなんだからぶっちゃけたっ
ていいじゃないか。まあ、最初から頑張る気の無い私のは片思いと
は言わないかもしれないけどさ。

すると久我はやはり目を逸らして言った。

「・・・他人のことを、まるで自分の事みたいに喜べる所。」

「へえ〜。なんか分かる。知らない人でもさ、ニコニコ笑っている
とこっちまで幸せな気持ちになるもんねえ。」

私の場合は多分『特技』とも関係していて、がっちり繋がった糸

を持った恋人同士が幸せそうに歩いていると、その幸福感を分けてもらったような気になるのだ。まあ、逆に表面は幸せそうなカップルでも不倫や浮気しているのも分かっちゃったりするんだけどさ。そんな私に久我はそっけなく言い放つ。

「能天気。」

「何よ！いいじゃない。幸せなことはいっぱいある方が！！」

「まあ、な。」

私の力説に心動かされたのか、今日初めて久我が笑った。しょうもねえなあ、みたいな顔なのが気になる所だけど、まあいいか。だって笑顔には変わりないんだし。

その日は久我と一緒に部屋を出た。外に出ると真っ青な空に白い飛行機雲が二本綺麗な線を描いている。なんだか得した気分だと言ったら、私の隣でまた久我が笑った。

3・私の糸

その日最後の授業が終わり、校舎から生徒達が一斉に外へ出ていく。そのまま家に帰る友人達と別れた私はのんびり部室へと向かっていた。

自分の前を行き来する大学生達。人が多ければ多い程、当然見える糸の数も多い。太さや長さ、色の違う様々な糸が人と人を繋いでいる。

私は糸を見ることが出来ても触れることは出来ない。例えば大好きな大野部長の彼女に嫉妬してそれを切り離したり、逆に誰かと誰かの糸を無理やり固結びしたりするような、糸に干渉することは出来ないのだ。そのお陰で目の前を赤い糸が横切っていたとしても歩く邪魔にはならず、触れても体をすり抜けるだけだ。

ふと自分の左手を見て思う。大学生ともなれば皆それなりに恋人がいたり、片想いをしていたりと左手の赤い糸が存在している。けれど私の左の小指からはそれが無い。当然自分の糸は見えないのだから当たり前なのだが、多分見ることが出来ても意味が無いだろう。私は本気の恋をしていないのだから。

いつか私にも運命の相手とやらが現れるのだろうか。本当にそんな相手はいるのだろうか。皆の糸を眺めているといつも頭に浮かぶこの疑問。けれどその答えを導き出せる筈も無く、大抵へこんで終わるのだ。

そんなことを考えている内になんだか部室に行く気がなくなった。行けば久我と美紀ちゃん糸を見ることになる。今日は二人を応援する元気も無かった。

お昼の時間にいつも人で溢れている中庭も放課後はほとんど人が無い。私は端のベンチに腰を下ろし、息を吐いた。再び自分の左手を眺める。

(私に恋愛なんて無理なんじゃないのかな。)

糸が見えてしまうせいで、恋愛は全て他人事に思えてならなかった。それでもこうしてへこんでいるということは、それなりに恋愛願望はあるのだ。だってそうだろう。繋がった糸を持つ男女を見て、いいなあと心の内で呟いてしまうのだから。どうやったら心と心が繋がるような、そんな相手を見つけれられるのかな。

いつか来るであろう未来。見えない私の赤い糸。その先は一体誰に繋がっているんだろう。

(うーん。気持ちいい。)

頭を撫でられるのは好きだ。だからと言っていい歳こいた自分が親から頭を撫でてもらえる筈もなく、けれど心地の良い温度を感じてうつらうつらしていた目を開ける。すると視界に入ったのは大きな手。……いや、大き過ぎる。何これ。

自分の顔をすっぱり掴んでしまえるほどの大きな手が今度は私の背中を撫でた。慌てて振り向けばそこにあつたのは真っ黒な毛並みを持った背中。そしてその先についている長い尻尾。

(……尻尾??)

そう心の中で呟くと同時にそのしっぽが左右にユラユラ揺れる。ご機嫌と言わんばかりのその動きに私は啞然とした。そう、そのしっぽの持ち主は他でもない私だったのだ。慌てて自分の手元を見ればそこにも黒い毛並みで覆われた小さな手が二つ。裏返して見えるのは灰色の肉球。

(・・・なんだこれ。)

猫だ。迷うことなく猫だ。何故か黒猫になっている私は、デニムを穿いた男の人の膝の上でだらんと横になっている。自分を撫でる手が大きすぎると感じたのは、私が猫になっていているせいだったのだ。なあ〜んだ、そっか！などと暢気の事を考えている暇などないのだが、私はこの不可思議な現象の正体をすぐに見破った。

(夢でも見ているんだわ。だから猫なのね。)

そうと分かれば遠慮する事はない。手の主よ！思う存分私を撫でるがいい！！

その気持ち伝わったのか、遠慮がちに撫でていた手にほんの少し力が籠る。あ、良い良い、その力加減。背中も良いけど、やっぱり頭も撫でて欲しいな。あ、そう、そこ。

しばらくそうして撫でられていると、ふっとその手が離れた。

(やだ、もつと・・・)

そう思って顔を上げれば、その手の小指から赤い糸が延びているのが見える。決して短くは無いその糸。きつとこれはもう誰かと繋がっている糸なのだ。

(ああ。この人も『私の』じゃないんだわ。)

それが分かって寂しくなった。自分を撫でてくれたこの手は自分だけのものではないのだ。猫になってもこんな寂しさを感じるなんて、現実って厳しい。いや、これは夢だから現実じゃないか。

仕方なくその膝から降りようと立ち上がる。けれどそれを手の主

によって阻まれた。その手は自分から離れようとした黒猫、もとい私を抱き上げたのだ。

(わわっ。ちよっと待って!!!)

急に不安定な体制になって、慌てて目の前の服にしがみつくと手の主がふっと笑ったのが分かった。その表情が気になって私は顔を見上げる。すると

「小柴、起きたか？」

「どわっ!!!」

耳元で囁かれた声に驚き、慌てて目を開く。すると私の隣にはいつの間にか久我が座っていた。周囲を見渡せばそこは夕暮れに染まる中庭。私がいるのは端に置いてあるベンチ。そして何故か隣に座っている久我。

「……やつば夢か。」

「は？」

猫になって撫でくり回されていたなんて言える筈も無く、私は慌てて話を逸らす。

「あ、いやいや。気にしないで。っていうか、いつからここにいたの？」

「30分くらい前。」

「何？もしかして私ずっと寝てた？」

「ああ。」

「起してよ！」

「だから起しただろ。バイトはいいのか？」

「へ？」

反射的に腕時計を見る。針が指し示しているのは16時38分。17時から始まるバイト先は大学から歩いて15分。着替える時間も入れるとかなりギリギリだ。

「わ！！もう行かなきゃ！！じゃあね！」

「おう。」

慌ててベンチに置きっぱなしだったバッグを掴み、校門に向かって走る。その途中で忘れ物に気付き、私は足を止めた。振り返れば久我がベンチから立ち上がった所。彼のバイトが始まるにはまだ時間があるから、これから部室へ向かうのだろう。

「久我　！！」

離れた所から私が叫べば、久我が顔を上げる。

「起してくれてありがとう　！！」

いくら慌てていたとはいえ、お礼くらいはちゃんと言いますよ。軽く手を上げてそれに応えた久我に一度手を振ると、私は再び走り出す。その後ろで困ったように笑った久我の表情は残念ながら見ることは出来なかった。

* * *

翌日の放課後。部室のドアを開けたポーズのまま、私は冷や汗をかいていた。空気を読むのが特技の私が最悪の場面に居合わせてしまったのだ。ヤバイ。これはヤバイ。さり気なく踵を返そうにもばつちり当事者、私よりも先に部室に来ていた久我と美紀ちゃんにドアを開けたところを見られている。見て見ぬフリはやっぱりダメかしら？あ、ダメですか。そうですか。

二人の刺さるような視線を感じながら、仕方なく私は中に入ってドアを閉めた。

「こんにちは……。」

「……。」

「……こんにちは。」

無言で目を逸らす久我。そして弱々しく返事をしてくれた美紀ちゃん。その目には涙が浮かんでいる。私は咄嗟に彼女の左手の小指を見た。先日までは鮮やかな赤色をしていた彼女の片想いの糸は、今はだらんと垂れ下がり、細くなって色もくすんでいる。

(ああ、やっぱりそう言う事か。)

何も言えずに居るしかない私の横を通って美紀ちゃんは部室を出て行ってしまった。

久我と二人きりになってしまった部室の中。いつもと同じように席に付く事が出来なくて、私は間抜けにも入口に突っ立ったまままだ居た堪れなくなって重い空気を放っている久我に声をかけた。

「……ごめん。」

「なんで謝るんだ。」

「なんか、タイミング悪かったみたいだから。」
「別に、お前のせいじゃないだろ。」

そうは言ってもこちらら空気が読めるもんで、無神経にへらへら笑うことも出来ないっつーの。

私は久我に聞くことはしないが、多分、いや絶対美紀ちゃんは久我に告白したのだ。そして久我は、それを断った。その証拠に美紀ちゃんの糸は細く元気が無くなり、想い人が彼女ではなかった久我の糸は逆に昨日よりも太くなっている。彼の中で悩みの原因の一つがなくなっただらう。それはもしかしたら美紀ちゃんの事だったのかもしれない。彼女のアプローチは分かりやすかったから、久我也薄々は彼女の想いに気が付いていたに違いない。

すると私達の重い空気を破るように穏やかな声が入ってきた。

「こんにちは。」

「あれ、部長。珍しいですね。」

現れたのはいつも水曜日に顔を見せない部長だった。するとその後ろにもう一人、女の人の姿が見える。写真部員ではないその人物は落ちていたピンクブラウンのストレートの髪に、ドット柄のワンピースを着た部長の彼女だった。二人は私と同じ心理学科の先輩でもあるので、同じ校舎で見かけることが多い。互いにほんわかした雰囲気良く似ていて、私の憧れでもある。

「うん。昨日ここに忘れ物しちゃって。青いファイル見なかった？」

「あ、もしかしてあれですか？」

機材がしまつてある棚にぽつんと置かれている鮮やかな青いファイルを指差すと、部長は「あったあった」と言ってそれを手に取った。ドアの所で部長を待っていた彼女さんと目が会い、会釈すると

彼女もにっこりと笑って頭を下げてくれる。

うわ〜。癒されるう。さっきまでの重苦しい空気が嘘のようだ。美紀ちゃんのような可愛らしさとはまた違う、大人の余裕を持ったお姉さんの、その胸に飛び込んで甘えたくなるような感じ。部長が戻ってきて二人が並ぶと更にその雰囲気が増す。いいよねえ。私はあの二人の子供に生まれたかったよ、ホント。

「それじゃ、二人ともまた来週のサークルでね。」

「はい。お疲れ様です。」

ひろひらと手を振って二人の先輩カップルを見送る。パタンと扉が閉まると、後ろから訝しげな声がした。

「・・・なんで笑ってんだ？」

「え？」

「今部長だったろ？」

「うん。部長だったね。」

何を言っているんだろう。どっからどう見ても部長だったじゃないか。私の知っている限り久我は眼鏡もかけないし、コンタクトでも無かった筈だ。まさかこの歳で急に老眼になったわけでもあるまい。

首を傾げる私に向かって久我は変な顔をする。

「うん、て。。。」

「え？何？」

「お前、何考えてんだ？」

「へ？何よ、さっきから？」

何を考えているのか分からないのはこっちの方だ。するとガタッ

と音をさせて彼は座っていた椅子から立った。こっちに近づいてくるが、なんだか顔が怖いぞ久我！！

「部長が好きなんじゃないのかよ。」

はい？それって今更確認するようなこと？今まで散々そうだって言ってきたじゃないか。

「好きだよ。」

「なら！」

「好きな人が幸せそうだったら嬉しいでしょ？」

何を言っているんだ、とばかりに言い返す。そりゃあ、彼女に嫉妬するような本気の恋じゃないよ。でもさ、やっぱり部長のことも部長が好きな彼女さんのことも好きだもん。ずっとずっと幸せで居て欲しいじゃないか。

すると今度ははあ、と深い溜息をつかれた。

ちよつとちよつと、本人を前に溜息をつくなんて失礼な。むつとして口を尖らせると、久我は不機嫌そうにポツリと零した。

「紛らわしいんだよ・・・」

「ちよつと何よ、さっきから。やけに機嫌悪いわね。」

すると突然、ぐいつと強く腕を引かれる。あまりに距離が近くて私は固まってしまった。こうして見上げると久我の背の高さに改めて気付かされる。私も女子の中では背が高い方だが、それでも十センチくらいは違う。ずっと見ていたら首が痛くなりそうだ。

「久我？」

「もう遠慮しないからな。」

「は？何言つて・・・」

言い終わる前に久我の顔が覆いかぶさってきた。彼の大きな手のひらがいつの間にか私の後頭部を抑えていて逃げる事も出来ない。気付けば温かく柔らかい感触が自分の唇に触れていた。

(あれ・・・これって・・・)

間近にある久我の顔。離れたと思つたら再び唇を覆う感触。一度や二度じゃない。何度も何度も触れては離れ、最後にちゅっというリップ音をさせて久我の顔が遠のいた。

「・・・・・・・・な、なななな」

その触れ合いがなんだったのか。散々好き放題やられた後でやっと理解した私の顔がカーツと熱くなる。それを見た久我は満足そうにニヤリと笑った。

「また明日。」

それだけ言つて、奴は自分の荷物を持ちドアへ向かう。カバンを持った左手が私の目に入った。久我の小指。鮮やかで迷いの無い太く赤い糸が真っ直ぐに私に向かって伸びている。

思わず自分の左手を見た。私には見えない自分の指の先。それはもしかしたらもしかして・・・

久我に繋がってるの、かも？

バタンツと部室のドアが閉まる。その音に我に返つた私は真っ赤

な顔のまま叫んだ。

「絶対無い!!!」

END

3・私の糸（後書き）

繋がる糸の先。最後までお付き合いいただきありがとうございます。

いつにないテンションで書いたお話でしたが、最後まで楽しく執筆できました。

久我はむっつりSです。いつもはソレを外に出さない彼ですが、好きな子の前でだけSっぷりが発揮されます。真奈は負けず嫌いなので、多分この二人は簡単にはくっつかない気がします。それでも真奈に本命がないことを知った久我はSのワザ(?)を駆使して彼女を追い詰めるのでしょうか。おー、コワ。

二日くらいでバーツと書き上げた話なので、誤字脱字も多いかと思いますが、ちょこちょこ訂正入れていきます。読みづらかった方いらっしやったら申し訳ございません。

赤い糸の先のお相手を見つけた方も、そうではない方もこの話を楽しんでもらえていたら嬉しいです。

拙いお話にお付き合いいただき、ありがとうございました。

【おまけ】 久我晃平の回顧録 前編

最初からサークルなんて入る気は無かった。元々集団行動は得意ではないし、授業が終わればバイトに時間を費やせばいい。そんな俺の気を変えたのはたった一枚の写真。

大学に入学して一週間。先生の都合で突然その日最後の授業が休講になり、俺は時間を持て余していた。入学早々始めたバイトの時間まで後二時間。何をして時間を潰そうか。

まだ慣れていない校内をブラブラ歩く。するとある校舎の一階ホール、ソファがある休憩所に写真が飾られている事に気が付いた。ふらりと立ち寄ってみれば写真サークルの文字と共に額に入った写真が壁にかけられている。海や花々、笑う子供達、虹のかかった空とビルの建つ街。どこにでもあるそれらの風景が鮮やかなカラーや落ち着いたモノクロ写真となって切り取られている。特に感想もなくそれらを順に眺めていた時、ある一点で足が止まった。

決して撮影技術が高いわけではない。ポラロイドカメラで撮られたそれは他の写真よりも鮮明ではないし、色が綺麗なわけでもない。写っているのは目の前を通り過ぎる人々と端に移った二人の男女。それだけだ。けれど目を惹く。何故なのだろう。

「いい写真でしょ？」

同じ男とは思えない穏やかな声。それが自分に向けられた言葉だと初めは分からなかった。横を向けば自分よりも背の低い男性が同じ写真を見ている。レンズの薄い眼鏡の奥にある目は優しく細められていた。俺ももう一度ポラロイド写真に目を戻す。

フレームの端に映った男女は互いを見て笑っている。とても幸せそうだと、思った。腕を組んでもいけない、手を繋いでもいけない。けれどきつとこの二人は恋人同士だと分かる。付き合いの長さまでは分からないが二人の視線がそれを物語っていた。同じ道をいく人々は周囲に無関心に歩いている。だからこそこの二人の存在が浮き上がっている。あたりまえの日常に溢れている光景だけれどほんのり心が優しくなる、そんな写真だった。

「写真に興味があるの？」

眼鏡の男性がそう言った。だが、俺は首を横に振る。

「撮るのに興味は無いです。」

「そう。これね、実は今年の新生が撮ったんだ。」

そうやって彼はポラロイドカメラを手にした。どうやらここは展示だけではなく、無償でポラロイドカメラを貸し出ししているらしい。確かにサークルに興味を持たせるなら有効な手だ。それに見事つられた新生がこの写真を撮って行ったのだと言う。多分、この人は新生の勧誘をしている先輩なのだろう。

「入ったんですか？」

「うん。入部してくれたよ。」

「へえ。」

写真に興味は無い。サークルにも特別入る気は無かった。けれど、この写真を撮った人間に興味が湧いた。

「撮らなくてもいいんですか？」

すると先輩はちよつと驚いた顔をした後に、最初に声をかけたのと同じ笑顔で頷いた。

「うん。ウチはそんなに真面目なサークルじゃないし。見るだけでも、写真に興味があるなら歓迎するよ。」

入部した決め手はあの写真と、そしてこの先輩、大野部長の押し付けがましくない話し方だったと思う。よもやこの人の存在に悩まされることになるとは知らずに。

よくしゃべり、よく笑う。それは相手の年齢も性別も関係なく。人の懐にするりと入りこむくせに、一步引いて他人事のように周囲を見ていることもある。それが俺から見た小柴真奈の印象だ。

写真サークルに入部した後、初めて顔を合わせたあの写真を撮った人物小柴が女だった事に驚いた。写真の色や綺麗にフレームに収める事など考えずに無造作に撮られたあの写真のイメージから、俺は無意識の内に小柴は男だと思っていたのだ。

小柴はおかしな女だった。185cmの身長、無愛想な顔。初対面では誰もが気軽に声をかけられない俺に、なんの気遣いもなしによろしくと笑いかけてきた時は驚いた。

大学になると急に化粧や服装が派手になる女子に比べ、小柴の生き方は実にシンプルだ。化粧つけの無い顔、実用的な服装。けれど彼女のぱつちりとした目も艶やかな黒髪も、そしてスタイルと姿勢の良さも魅力となり人目を惹く。小柴は決して地味ではない。いつの間にか彼女を目で追うようになったのはいつからだったのか。

(まただ・・・)

小柴が俺の前で機嫌良さそうに微笑む。最近こんな事が多い。サークルの部室でよく顔を合わせる彼女は、挨拶をした後何故か俺の手を見る。凝視するわけではなくさり気なくちらりと目線を寄越すだけだが、それが毎回ともなると気になって仕方がない。だが、何を考えて俺の手を見るのか訊くことはしなかった。彼女が俺を気にかけている事が、俺にとっては嬉しいからだ。

それなのに、何故こうなった。

「・・・・。」

俺の目の前には嬉しそうにオセロ盤を用意している女性がいる。一つ下の後輩、川田美紀。頭の天辺からつま先までおしやれに気を使ったいかにも今時の女子である彼女と二人きり。何故なら先程まで共に写真部の部室にいた小柴が先に出て行ったからだ。しかも満面の笑みを浮かべて。

(ムカつく。)

あの顔を見れば何を考えているかなんて聞かなくても分かる。俺の都合を無視して後輩を応援する小柴が憎たらしい。あいつはいつだってそうだ。無防備な笑顔と自由な言動と、そして無邪気なお節介で俺を振り回す。そして結局、最近自覚し始めた自分の恋心を言う勇氣のない俺はそれに逆らう事が出来ないでいる。

そう。俺は小柴真奈にどうしようもなく惹かれていた。きっかけはあの写真。そして恋愛感情へと引き上げたのは彼女の全て。顔も声も、その行動言動全て。それまでつまらないモノクロ写真のようだった風景が、彼女がいるだけで色鮮やかな世界に変わるのだ。

因みに俺が彼女に告白出来ない理由は二つある。一つ目が目の前の女、川田美紀。彼女は分かりやすく俺に好意を寄せている。それだけなら大した障害ではないが、彼女と仲の良い小柴がそれを応援しているのが問題なのだ。そしてもう一つが小柴真奈のとてもない鈍さ。他人の機微には敏感なくせに、自分に寄せられる好意には驚くほど鈍い。俺の気持ちにも、同サークル内にいる他の男達の好意にも全く気付かず、平気でヘラヘラと笑っている。

(・・・やっぱりムカつく。)

昨日小柴とやった時とは違い驚く程面白くないオセロを眺めながら、俺は早くバイトの時間にならないかと願っていた。

* * *

絶不調とはこの事だと思つ。理由は言わずもがな、小柴真奈だ。振り回されている自覚はあるが、今日ほどそれを自覚したことはない。

最近、小柴が部室に來ない。互いのバイトまでの時間潰しに必ずと言って良い程彼女に会っていたのだが、ここ一週間程バイトの日になっても顔を見せないのだ。俺からすれば二人きりで過ごす事出来る大切な時間。小柴にとってはただの暇つぶしでしかない事くらい分かっているが、此処まで避けられると腹が立つ。代わりに現れる川田を見るたび舌打ちしそうになるのを何とか我慢している程だ。

そして今、俺は今までに無い程苛立っていた。

(あれは……、坂上?)

放課後。今日も小柴が現れなかったので、俺は部室を出てキャンパス内をブラついてた。すると校内のカフェに彼女の姿を見つけた。その隣にいるのは知った顔の男。俺と同じ学科の坂上喜一だ。坂上は周りに敵を作らない爽やかなイケメンで、女子にはかなり人気がある。まさか小柴もその一人なのだろうか。

坂上と一緒にいる彼女は満面の笑み。何を話しているのだろう。坂上とどんな関係なのだろう。気になって仕方がないが、親しげなあの空気の中に割って入る勇気は俺には無い。俺に会わなくても小柴が心底楽しそうに笑っている事がどうしようもなく腹立たしかった。俺は毎日小柴に会いたいと思っているのに。

サークル活動あった日の翌日。俺はイライラした気持ちを抱えたまま部室へ向かってた。今日も小柴はいないかもしれないのに、それでも行ってしまうのはどこかで期待しているから。こんなに自分が女々しいとは知らなかった。やっぱり俺は振り回されているのだ。

部室がある廊下まで来た時、俺の足が止まった。写真部の部室前に立っている女の後姿。艶やかな黒髪のショートボブに悔しいけれど心臓が跳ねる。小柴だ。ただ、彼女は眉間に皺を寄せてなにやら唸っていた。どうやら真剣に何か悩んでいるようで、俺が近づいても気付く様子が無い。

(何だ?)

ぼんつと軽く肩を叩くと、大袈裟な程小柴がでかい声を上げる。

「うわっ！」

「・・・声がでかい。」

「あ、ごめん。」

へらりと小柴が気の抜けた笑みを向ける。それだけで俺の中のイライラが消えた。坂上に向けていたあの笑みとは雲泥の差だが、それを知られるのが嫌で俺は顔に力を入れて頬が緩むのを防ぐ。

共に部屋に入り、何もなかったかのようにいつも通りに二人で時間を潰す。だが俺の頭の中にあるのは坂上の事。自分の中だけで悶々と悩むのは俺らしくない。俺は出来るだけ表情に出さないよう努めながら口を開いた。

「お前、坂上と知り合いか？」

「坂上？つて坂上喜一？」

「ああ。」

「うん。同中だったよ。あ、そつか。久我も国際経済だったけ？」

「ああ。」

俺と坂上は国際経済学科。因みに小柴は心理学科。同中だとは初耳だが、俺が聞きたいのはそんなことではない。

「坂上と仲良いんだ？」

「いや。普通に話す程度だ。」

「坂上から私の事聞いたんじゃないの？」

フラッシュバックする楽しそうな二人の光景。口にするのは嫌だが仕方がない。

「・・・先週、木曜あいつといただろ。」

「ああ、木曜ね。いたよ。もしかしてカフェで見かけた？」

「ああ・・・。」

すると何故か小柴は真剣な顔で俺を見つめてきた。初めて彼女と長い時間視線を合わせ、俺は居た堪れなくなって口を開く。

「・・・なんだ。」

「久我ってさあ。もしかして・・・。」

「・・・。」

なんだ？やはり彼氏でもないのに他の男という事を気にするなんて分かり易過ぎただろうか。こんな形で彼女に気持ちを知られるのは本意ではないが、それならそれで仕方がない。覚悟決めた俺に小柴が口を開く。

「坂上と仲良くなりたいの？」

「はあ？」

我ながら間抜けな声が出たと思う。何をどうしたらそうなるんだか、小柴の思考回路は理解不能だ。

「なんだ。違うのか。」

「何でそうなる。」

「だって、やけに坂上のことばかり聞くから。」

そこまで気付いていても俺に気持ちに気付かないのは、俺が完全に小柴の範疇外だからか？

「・・・。ただの同級生か？」

「うん？違つよ？」

待て。それはどういう意味だ。

嫌な予感が頭をよぎる。先を聞くのが怖い気もするが、ここまできたら聞かすにはいられない。

「……………どう違つ。」

「坂上はねえ、私の親友の彼氏なの。」

ふふん、と小柴が自慢げに鼻を鳴らす。男だったらその得意げな顔をぶん殴つてやりたい所だ。

親友の彼氏。小柴のダチの彼氏。そうかよ。今までの俺が悩んできた時間を返せ、馬鹿小柴。

「……………あ、そう。」

「うわっ！なにその興味ねえ、みたいな返事！そっちが聞いたくせに！」

「はいはい。悪かったよ。」

「軽っ！！」

完全に肩の力が抜けた俺は小柴とどうでもいい言葉の応酬を繰り広げる。色気も何もないやり取りだが、これがいつもの俺達。段々と機嫌も戻ってきて、俺は意外と現金だな、と自分の評価を改める。すると不意に小柴が言った。

「ねえ、なんか悩んでるんだつたら愚痴くらい聞くんよ？」

「……………」

こういうことは鋭いんだよな、こいつ。もういつその事聞き直つてしまおうか。

俺は素直に自分の頭の中を言葉にしていた。

「・・・何考えてんのか分かんねえ。」

すると小柴は偉そうに腕を組んでうんうんと頷く。

「好きな人の事ほど分からないものだよねえ。」

あまりに実感の籠った言葉に聞こえて、やっぱり小柴にも好きな奴がいるのか、それは大野部長のことなのか、と思った。こんな悩みを聞いている時点で相手が俺じゃない事は明らかで、その問いを口には出来なかったけれど。

「でもさあ、まあ、これは私の勘みたいなものだけど、もしかしてちょっと諦め気味じゃない?」

だからなんでそういう事だけ敏感なんだ、お前は。ああ、もういっそのこと決定打をくれれば楽なのに。

「そいつは俺のことどうも思っちゃいない。」

「どうして?そんなの分かんないじゃん。告白されてから意識することもあるよ。」

「・・・。」

「・・・何?」

俺が告白したら、大野部長じゃなくて俺を見るのか?そんな想いを込めて小柴を見る。けれど口に出さないそれが伝わるはずも無く、小柴は怪訝な顔をした。どうせ俺が睨んでるとかそんな風にしか捉えていないのだろう。目つきが悪くて悪かったな。

「・・・いや。お前は、まだ部長のことが好きなのか？」

「うん。好きだよ。」

「でも彼女がいるだろ？」

「そりゃそうだけど。他に気になる人がいるわけじゃないし、今のところ一番は部長だもん。」

・・・分かっててもやっぱりムカつく。叶わない恋だと自覚しているのに、どうしてもいつまでもお前は大野部長事が好きなんだ。どうして他を見ようとしらない。

「部長の何がそんなにいいんだ？」

「うーん。顔も声も身長も性格も好き。私の理想の男性像ぴったりなんだよね。」

なら俺は完全に範疇外だな、と実感する。もうこんな会話どうでも良くなってきた。

「あ、そ。」

「そういう久我は？その子のどこが好きなの？」

「・・・。」

「何よ。人に言わせて自分は言わない気？」

告白しても無駄なら、きつと俺はこの先小柴にこの気持ち告げることは無い。小柴の口から「ごめん」という言葉は絶対に聞きたくないからだ。なら、これくらいは言ってもいいか。

「・・・他人のことを、まるで自分の事みたいに喜べる所。」

親友や後輩の恋を心配し、自分の事のように喜び、笑う。見ず知らずの他人の絆を見つけ出して微笑む。あの写真のように。

自分の事なんか二の次なお人好し。そんなお前が良いんだ。俺が欲しいのは川田じゃない。お前なんだ。

「へえ〜。なんか分かる。知らない人でもさ、ニコニコ笑っているところちまで幸せな気持ちになるもんねえ。」

当たり前だろ。お前の事なんだから。

相変わらず鈍い小柴に俺は毒気を抜かれて表情が緩んだ。

「能天気。」

「何よ！いいじゃない。幸せなことはいつぱいある方が！！」

「まあ、な。」

ああ。お前はそういう奴だよ。他人も幸せだから自分も幸せだと思える。何の徳があるんだと、偽善じゃないかと言われるかもしれないが、きつと小柴はそんな言葉を笑い飛ばすに違いない。

互いにバイトの時間が近づき、俺は久しぶりに小柴と共に部室を出た。今日は快晴の良い天気で、ふと眩しげに小柴が空を仰ぐ。それにつられて見上げれば、平行に並んだ二本の飛行機雲が空に模様を描いていた。

「なんだか得した気分。」

ポツリと零したその一言が実に小柴らしくて、俺はやっぱりこいつが好きなんだと思った。諦めてしまおうか、そう思っていた気持ちが消えていく。開き直ってしまえばいい。小柴が大野部長しか見えていないと言うなら、どんな手を使っても俺を視界に入れてやる。

何も知らない小柴の隣で俺は一人、決意を固めていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4932x/>

繋がる糸の先

2011年11月20日20時24分発行